

ミツエおばさんへ

達欣からの一報を受けました。

ため息をつきながら、目をつぶると、色々な思い出が臉に浮かび上がってきます。

学生の頃から可愛いがっていただきました。

しょっちゅう西日暮里に行き、何度もアルバイトをさせていただきました。おじさんを筆頭に達欣、会社のみなへ強めの号令をかけながら、会社を切り回すお婆さんの姿を思い出します。

大人になりたての頃、お婆さんの爆竹が炸裂し、ずいぶん長く出入り禁止を言い渡されたことがありましたね。

今思うとあの時のお婆さんは、達欣にまっとうな人生を歩ませようと、僕を遠ざけたのでしょうか。

いつの頃からか、政治経済の話が多くなり、週刊誌をながめながら大きめのひとりごとで、論評を語っていましたね。

ときおり、「こんな政治家は許しちゃいけないねえ」と、ささやく時もあり、僕が「国会に」 」と冗談を言うと、腕組みしたまま真顔で「いいねえ」と喜んでいましたね。

昨年末に宿泊させていただいたときには、献身的な達欣の姿を見て「達欣は優しい息子になりましたね」と、僕が軽口を叩くと、かみしめるように「たっちゃんは本当に優しい息子だよ」と、つぶやいたほほえみが思い浮かびます。

達欣の家はまるで僕らの基地でした。その仲間たちも還暦がせまる年となり、みな、悲喜交々な人生を歩んでおります。歳を重ねると人間関係が薄くなるものですが、仲間たちとの結束力は年々強くなっているように感じています。それぞれが助け合って支え合ってやっています。

お婆さんから教えられた、昭和の働きっぷりは今も体にしみついています。おじさんのことも心配でしょうが、これからは何の心配もせずに、ゆっくりとお休みください。

爆竹母ちゃん、お疲れ様でした。

ミツエお婆さん、ありがとうございました。

安らかに、安らかに・・・

E.H より